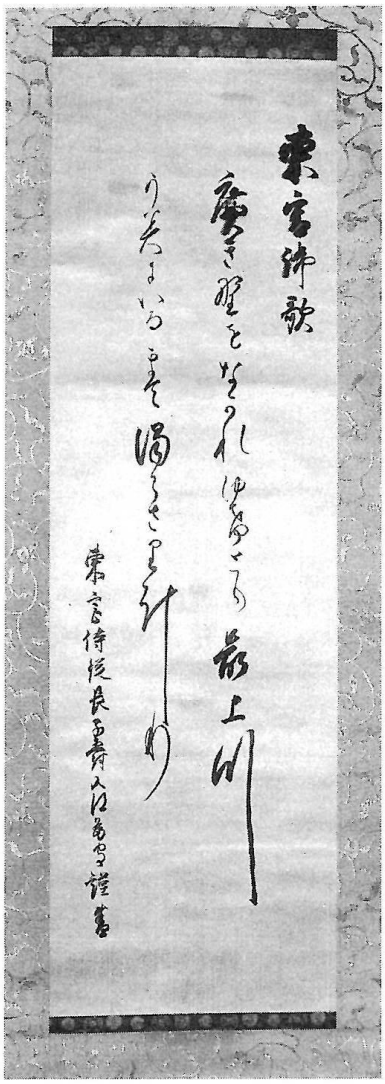
第44回

市立

光丘文庫書画展

2階館蔵品展



東宮御歌　入江為守書

開催期間／1987年４月22日～６月14日

開館時間／９時30分～16時30分

休 館 日／月曜日・祝日

入 館 料／大人100円・児童生徒50円

酒田市立資料館

酒田市一番町８－16　ＴＥＬ(0234)24－6544

●開催にあたって

市立光丘文庫は広く市民に親しまれた由緒ある文庫である。文庫は、母なる川最上川、日本海、酒田港、それに飛島まで眺望できる日和山公園、光丘神社の近くにあり酒田市内を一望できる高台に鉄筋コンクリート２階建社殿造りの建物である。

文庫は宝暦８年（1758）本間家３代の当主本間四郎三郎光丘の遺志を受けつぎ大正12年（1923）８代当主本間光弥が歴代の集書１万数千冊と維持基金10万円を提供して財団法人光丘文庫を設立したのがはじまりである。

その後昭和33年（1958）に「光丘」の名称を永く保存すること。建物は図書館以外には使用しないことの条件をもとに酒田市に蔵書60,130冊、参考資料2,122点と建物・家具・什器のいっさいを寄付し解散し、酒田市立光丘図書館（光丘図書館）に改称した。

昭和57年（1982）４月総合文化センターが設立開館され同館内に市立中央図書館が設置されたことにより、酒田市立光丘図書館が酒田市立光丘文庫と改称され現在に至っている。

今回は光丘文庫に数多くの貴重な資料が所蔵されている中から江戸・明治・大正・昭和初期までの書画を中心に展示することにした。この機会にゆっくり御鑑賞いただければ幸いです。

開催にあたり貴重な資料を心よく提供されました酒田市立光丘文庫に厚く感謝申し上げます。

1963. 38. 3. 9
県文化財指定　◎光丘文庫所蔵典籍　　両羽博物図譜59冊
酒田市有形文化財に指定　◎光丘文庫所蔵典籍等
出羽一国御絵図一舗松平武右衛門業取書197冊　野附文書22冊　松森文庫128冊
弘采録139冊　病間雑抄72冊　亀ケ崎足軽目附御用控８冊　１念多念証文憲章４冊
孫子詳解５冊　長翠句集２冊　最上川御歌附東宮台臨之処対幅　酒田大震災実況図１巻
中山高陽書簡１幅　明暦酒田町絵図１枚
＊蕨手刀１口　＊城輪柵跡出土器１群　＊黒森掘割基盤層発掘石器土器１群
＊飛島出土器１群　＊鳥海山模型（宝永元年）１基　＊印は酒田市立資料館へ移管

●展示目録

不玉、俳諧付合

伊東　不玉（いとうふぎょく）
玄順・潜淵・淵庵　慶安元（1648）～元禄10（1697）

俳人。医師伊東是久の長子として酒田に生れる。寛文10年（1670）23歳のとき京都に上り長井宗朔のもとで医学を修め、のちに下の山で施療を行う。天和３年（1683）伊勢の俳人大淀三千風が全国行脚の途次、酒田に不玉を訪ねたとき五大堂で句会を開き、元禄２年（1689）６月俳聖芭蕉が奥の細道をたどって酒田に来た折にはその宿をつとめて親交を結ぶ。同五年（1692）俳諧美濃派の開祖各務支考を迎え、羽黒の呂丸とともに象潟に遊ぶ。50歳で歿し酒田妙法寺に葬られる。

伊東　不玉　不玉俳諧付合　　１幅
徂徠一門の図　　１幅

中山　高陽（なかやまこうよう）
醉墨山人・松石斎・玩世道人　享保２（1717）～安永９（1780）

徳川中期の南画家。初め名は象先、字は延冲。のち名は延冲、字は子和。土佐高知の商家に生る。性敏達、経史を藩儒富永惟安に学んで詩文を能くし、書は關鳳岡を師とし、画は彭百川に従遊して、最も人物山水に長じた。宝暦８年（1758）江戸に出て、画を以て一家を成し、最も井上金峨、沢田東江と親しくした。安永元年（1772）東北に漫遊し、紀行を「東遊日記」という。同９年（1780）帰国の途中、大阪よりの船中で歿したと伝えられる。年64。

市文　中山　高陽　書翰　酒田諸君　宛　　１幅

徳川　脩姫（とくがわなをひめ）

宝暦６（1756）～文政３（1820）

酒井忠徳（ただあり）室、田安中納言宗武の養女。安永２年（1773）11月25日輿入れ、同４年９月23日母君宝蓮尼公と共に将軍家に拝謁す。その後しばしばこのことあり。文政３年（1820）正月７日75歳で江戸にて卒し、同月19日江戸の芝増上寺内清光寺に葬られる。

徳川なを姫　書翰　左衛門尉　宛　　１幅

酒井　忠器（さかいただかた）

千次郎・新太郎・摂津守・左衛門尉・左兵衛督・梅溪・梅翁・歓喜院（かんぎいん）　天明７（1787）～嘉永７（1854）

庄内酒井家10代。９代藩主酒井忠徳の次男として江戸で生れ、文化２年(1805)９月家督を相続して庄内藩主となり、翌年７月初入国、同４年(1807)６月松平信明(伊豆守)の娘亀代姫を妻とする。文化８年(1811)酒田の本間光道を政務に参与させて新政を行い、倹約令を施行して緊縮農政の徹底をはかり、また同13年(1816)には政教一致のため藩校致道館を御持筒町から郭内の馬場町十日町に移転してその施設を拡充した。文政11年(1840)11月幕府より越後長岡への転封を命ぜられたが、善政を慕う領民挙げての阻止運動が効を奏して翌12年７月遂に幕命は撤回、のちに天保義挙と称された。同13年(1842)４月隠退して左兵衛督。絵画に長じ、68歳のとき江戸神田橋邸で逝去、鶴岡大督寺に葬られる。

酒井　忠器（ただかた）　一行書　十三歳の書　　１幅
酒井　忠器　瀧之図　　１幅
酒井　忠器　布袋図　　１幅

御国替沙汰やみの絵　　１幅

池田　玄斎（いけだげんさい）

祐治・礼之・礼孺・子和・愛山・避喧叟　安永４(1775)～嘉永５(1852)

文人。庄内藩士池田祐平の長子として鶴岡に生れ禄100石を給される。文化元年（1804）30歳のとき耳を患って聾となり、家督を弟祐平に譲って名を玄斎と改め、以来万巻の書を読んで文筆に精励した。玄斎は、はじめ儒学を学んだが、のち国学を修めるために多くの書を渉猟し、また歌人杉山廉に和歌を学んで門人の指導に当る。藩儒白井重固、菅基および大山の国学者田中万春と親交あり。さらに大山に滞在した皇学の大家鈴木重胤と交わる。博覧強記、和漢の学に通じて長年にわたる随筆を著書にまとめ、また庄内の古記録を集めた「大泉叢誌」の編集に参画した。78歳で歿し鶴岡光明寺に葬られる。

池田　玄斎　山水図　　１幅

天　　真（てんしん）

徳顥・有孚・若沖・赤城　天明２（1782）～天保15（1844）

僧侶。生国不詳、越後岩松家用人の隠居と称したが、実は江戸下谷の人だともいう。故あって本姓名を秘し徳原元蔵など仮の名を用いた。天保３年(1832)庄内に来て各地を遊歴、田川郡堅苔沢村（のちの豊浦村現在の鶴岡市地内）聖徳寺に留まり、のち田川湯村長福寺に移る。同寺の住職周英の知遇をうけて滞在すること13年、鶴岡の文人墨客と交友を深めた。人物高潔で書をよくし、数多くの墨跡を残す。63歳で入寂、堅苔沢聖徳寺に葬られる。

天　真　賦金峰山　　一幅

水心子正秀（すいしんしまさひで）

寛延３（1750）～文政８（1826）

刀工。出羽国赤湯で生まれ、幼名を三治郎といった。彼の鍛治になる始まりは、「武州八王子下原の後裔吉英」に入門している。安永３年(1774)に秋元家の抱工となって川部儀八郎と名を改め、水心子と号した。寛政元年(1789)には相州山村綱広に入門し、彼なりに多くの実験やくふうを試み研究を重ねた。その為か、正秀の門を叩いた刀工の数は多く、少なくとも100名以上いたと思われる。この時代にしては、無類の研究家で教育者と言える。文政元年(1818)に名を改め天秀とし、水心子正秀を伜の貞秀に譲っている。同８年９月27日、76歳で歿す。

相馬　嵩彦　水心子正秀翁像　系譜付　　１幅

頼　　山陽（らいさんよう）

久太郎・徳太郎（のぼる）・三十六峯外史　安永９(1780)～天保３(1832)

鴻儒。名は襄。字は子成。その居を水西荘、山紫水明處、三面梅花處と名づけた。頼

春水の長男として生れ、14歳にして千載青史に不巧の業績を立つるを期す。文化４年「日本外史」「新策」の稿本成り、爾後その修整を怠らず「外史」は文政10年に至り、前老中松平定信の望みにより進献せられた。入京ののち小石氏梨影を娶って子峯、三樹（鴨厓）の２人の子を生み、天保３年６月12日喀血の余、９月23日俄に歿した。年53。明治14年50年祭に当り、畏くも祭粢料を賜い、24年贈正四位、昭和６年100年祭には、特に贈従三位に陞敍せられ、儒学界空前の栄誉を辱うした。

頼　山陽・頼　支峰　書翰　細川・松浦　宛　合装　　１幅

頼　　支峰（らいしほう）

支峰・又二郎　文政６（1823）～明治22（1889）

幕末明治の儒者。京都三本木に生る。山陽の第２子にして三樹三郎の兄。名は復、字は士剛。明治元年天皇東幸の際扈従、大学二等教授に任ぜられ、翌２年大学少博士に進み、従五位に敍せられた。のち職を辞して京都に帰って閑居す。22年７月８日歿、年67。東山高臺寺に葬る。著書、「神皇紀略」、「支峰詩文集」。

頼　山陽・頼　支峰　書翰　細川・松浦　宛　合装　　１幅

藪　　長水（やぶちょうすい）

長水・媟睡　～慶応３（1867）

徳川末期の画家。大阪の人。鶴堂の男。名は良。字は大造。島之内長堀橋の南に住した。画法を岡熊岳に受けて、山水花鳥などをよくした。

藪　長水　画　大塩平八郎首級　頼三樹　賛　　１幅

頼三樹三郎（らいみきさぶろう）

鴨厓・古狂生・三樹八郎・三樹三郎　文政８（1825）～安政６（1859）

幕末の志士。山陽の季士として京都三本木の宅に生る。名は醇、字は子春または士春。天保14年（1843）秋、昌平坂学問所に入ったが、幕府に対する反感の余り、上野寛永寺なる徳川氏の石燈を倒した廉で退寮を命ぜられた。安政６年（1859）正月江戸に檻致、福山藩邸に幽囚中、10月７日死刑を宣せられ、小塚原に戮せられた。時に35歳。文久２年（1862）12月、殉難志士の罪を特赦して改葬を許さるるに及び、萩藩の手にて吉田松陰と同じく世田ケ谷別邸の地に改葬せられ、回向院の碑も他有志の改設するところとなり、いま松陰の碑と共に並び建てられている。

鈴木　重胤（すずきしげたね）

雄三郎・勝左衛門・橿屋（かしのや）・厳橿本（いつかしがもと）・府生・桂州　文化９（1812）～文久３（1863）

国学者。穂積重威の次男として淡路国津名郡仁井村に生れる。天保３年（1832）21歳の折、江戸の国学者平田篤胤に書状を送ってこれに傾倒する。また出雲の岡部東平（はるひら）に師事し古典をきわめて皇学の大家となる。かたわら和歌に長じ宗匠となった。弘化元年（1844）庄内に入って大山の造酒屋大滝光憲方にいたり、各層多くの人びとに講義を重ねた。光憲はみずから門弟を率いてこれに入門した。重胤は庄内に来ること７回、光憲の好意に報いるため安政４年（1857）大山酒の江戸回送を斡旋して失敗する。文久３年（1863）１月京都に上り孝明天皇に謁して攘夷の和歌を献じたが、不敬の濡れぎぬにより、江戸小梅の自宅で暗殺された。享年52。江戸市ケ谷長延寺に葬られた。大正８年（1919）正五位追贈。

鈴木　重胤　長歌　もかみ川　　１幅

清河　八郎（きよかわはちろう）

元司・正明・震・士興・楽水・東陽・東雲・木鶏・芻蕘子（すうしょうし）　文政13（1830）～文久３（1863）

志士。田川郡清川村の酒造家斎藤治兵衛（富山）の長子として生れ幼名を元司という。後年一家を立て清河八郎と称した。弘化３年（1846）17歳のとき備前出身の勤王画家藤本鉄石が清川に来、その感化をうけて翌年江戸に上る。22歳で千葉周作の道場玄武館において北辰一刀流の剣術を修める。安政元年（1854）には昌平坂学問所に学ぶ。万延元年（1860）桜田門外の変が起こり、これを契機に国士を志し、幕臣山岡鉄舟らとお玉ケ池の清河塾で「虎尾の会」を結成して攘夷を唱え、幕吏佐々木只三郎らの手により麻布一の橋で暗殺された。享年34。清川村の歓喜寺に埋葬。明治41年（1908）特旨により正四位追贈のうえ昭和８年（1933）郷里清川に清河神社創建、のちその境内地に清河八郎記念館が建てられた。

清河　八郎　書翰　三井・五十嵐　宛　　１幅

松本　順（まつもとじゅん）

良順・子良・蘭疇・楽痴　天保３(1832)～明治40(1907)

軍医総監。遊佐郷升川村（のちの吹浦村、現在の遊佐町地内）出身で天保の義人といわれた佐藤藤佐の孫。父泰然は佐倉藩医で順天堂病院の創始者。安政４年（1857）幕命をうけ長崎で蘭医ポンペに学ぶ。長崎に養生所を建て西洋の教師を招き、わが国はじめての西洋医学講習を行い、文久元年（1861）迎えられて将軍家茂の侍医となる。戊辰戦争に参加し、明治４年（1871）兵部省出仕、陸軍軍医制度の整備に尽瘁し、同６年（1873）初代軍医総監に任ぜられた。享年76。男爵。

松本　順　書　聯幅　　双幅

円　　潭（えんたん）

祐助・探淵斎守真・淵潭斎守純・淵潭斎守澄・浮木叟・月山人・白道子

文化14（1817）～明治34（1901）

画僧。酒田天正寺町の呉服屋市原平三郎の４男。幼少時より絵を好んで、天保11年(1840)。24歳のとき江戸の絵師狩野探淵に入門する。たびたび京都・奈良・長崎等西国の社寺を巡歴して多くの古仏画を模写するとともに、冷泉為恭に大和絵を学んで独自の画風を確立した。嘉永４年（1851）35歳のとき鶴岡大督寺で仏門に入り、安政３年（1856）再び江戸に上って伝通院、さらに京都知恩院で修業するとともに絵画をも研究、この間、画家日根対山、村山半牧、勤王の志士藤本鉄石等と交友を深める。文久３年（1863）帰郷、田川郡大淀川村（のちの大泉村、現在の鶴岡市地内）淀川寺の住職となった。一時期酒田千日堂前に住んだが再び淀川寺に隠棲して85歳で入寂、同寺に葬られた。

市原　円潭　自画像　　１幅

市原円潭　自画像

入江　為守（いりえためもり）

明治元年（1868）～昭和11（1936）

大正昭和時代の御歌所長にして皇太宮大夫、子爵。京都の冷泉家に生る。為福の３子、17歳のとき入江為福のあとを継ぐ。幼少より父に従って歌学を修める。明治30年(1897)貴族院議員に選ばれ研究会に所属し、当選すること３回におよんだが、東宮侍従長に任ぜられて以来専ら側近に奉仕し、侍従次長、皇太后官大夫を歴任した。大正４年御歌所長を拝命。

明治天皇、昭憲皇太后の御集編纂の事業を完成す。人格、忠厚高潔、多趣味を以て知らる。

昭和11年３月19日歿、年69。贈正二位。

市文　　最上川御歌・東宮台臨處　入江為守書　　１幅

佐藤　政養（さとうまさよし）

与之助・李山・笙溪　文政４（1821）～明治10（1877）

鉄道功労者。農佐藤与兵衛の長男として飽海郡升川村（のちの吹浦村・現在の遊佐町地内）に生れる。幼少のころから性温順で父母に孝養を尽して郡内の評判となる。たびたび藩庁から表彰をうけ、また家業に従事するかたわら彫刻・俳諧をたしなんだという。嘉永６年（1853）には伊藤鳳山について漢籍を、さらに後藤恒俊について彫刻の技を学んだ。明治維新後民部省出仕鉄道助に任ぜられ東京・横浜間の鉄道布設のために尽瘁、明治５年（1872）12月工事完成して明治天皇より軍扇を賜る。勝海舟宅で病のため急逝。享年57。青山墓地に葬られる。昭和３年（1928）11月従四位追贈、同39年（1964）７月吹浦駅前に銅像が建立された。京都東山には勝海舟題字の「佐藤政養招魂の碑」がある。

佐藤政養肖像　百亭画　堀田璋賛　　１幅

海上　胤平（うながみたねひら）

六郎・椎園　文政12（1829）～大正５（1916）

歌人・下総海上郡三川村に生る。賢胤の３子。初め山岡鉄舟、千葉周作の門に剣をまなび、また諸国に武者修業して足跡を全国にのこす。のち紀州候に仕え、加納諸平の下に国学を究めた。明治２年（1869）水原県（越後）に出仕し、のち山形地方裁判所判事補となり、更に山形県勧業課に転じ在職９年、明治16年（1883）官を辞して東京に帰る。晩年には家塾を開いて、専ら歌学の教授に没頭、門人数千人に及ぶ。実に明治新派和歌運動の先触れであった。

大正５年（1916）４月２日歿、郷里に葬る。

海上胤平　和歌　鳥の海　　１幅

荒井篁一郎（あらいこういちろう）

明治32（1899）～昭和９（1934）

画家・本名鋼一郎、朝暘第一小学校を経て大正７年（1918）荘内中学校を卒業する。幼少のころより絵画に長じ先輩山口将吉郎に勧められて東京美術学校に入学した。大正12年（1923）同校を卒業、のち鶴岡に帰り八間町の自宅に舜水画房を設けて画を描き生計を立てる。多くのすぐれた作品を制作し、36歳のとき桧物町で死亡。鶴岡蓮台院に葬られた。

荒井篁一郎　象と童児図　　１幅

本間　光丘（ほんまみつおか）

四郎三郎・友次郎・久治・久四郎・宗善・其山　享保17（1732）～享和元（1801）

大地主。酒田本間家２代庄五郎（光寿）の３男。幼少のころから地元の修験覚寿院賢秀について経史を学び、寛延３年（1750）19歳のとき姫路の豪商奈良屋権兵衛に奉公、宝暦４年（1754）父死亡のため帰郷して家督を継ぐ。以来、叔父宗久に委せていた放逸な営業を改め、勤倹力行、経営の刷新をはかり、のちには田地の集積や庄内藩をはじめとする諸藩への大名貸しなど莫大な貸金等で蓄財を重ねて、一代50年間で全国屈指の大地主に成長する。

一方酒田西浜一帯の砂丘地砂防林の造成を計画、宝暦８年（1758）から東西250間、南北1,000間に松苗の植林を行い公益家として後世に名を残した。本間家中興の祖と称される。俳人としても著名。行年70。浄福寺に埋葬。大正７年（1918）特旨により正五位が贈られ、同13年（1924）には酒田下日枝神社境内に光丘神社が創建された。また山王森高台には、文化10年（1813）に建てられた釈公巌撰文の松林碑がある。

正五位本間四郎三郎光丘肖像画（写真）　　１面
本間光丘砂防林経営記念　　１幅

●文献

贈正五位本間四郎三郎光丘事暦	１冊
本間光丘　編纂者　安倍季雄	１冊
庄内平野の開発者　本間光丘	
五十公野清一著	１冊
救荒の父　本間光丘　堀川豊永著	１冊
贈正五位本間四郎三郎光丘小伝	１冊

●参考資料

新編　庄内人名辞典
大人名事典
酒井家世紀
新々刀名作展目録
大日本人名事典
続大阪人物誌
日本人名事典